



# 涼宮ハルヒの睦言

すずみけはるこのGStation

せいじんむけ  
18さいみまにあことわり

VENOM Presrnts.

# 涼宮ハルヒの睦言

すずみやまのひろむつみ

ある晴れた日の放課後。  
部室前にて小泉とすれ違った。  
「涼宮さんが張り切って待ちかまえていらっしやるので  
頑張ってください。」

あ、ボクは今日もバイトなので帰りますから。  
そう言って軽やかに肩を叩きつつ、去っていく小泉。

ハルヒが張り切る事って…またアレか？  
何やら不穏な空気を察しつつも、ここまで足を運んで  
今さら引き返すのも時間の無駄に感じられた俺は、  
深く考えずに部室のドアを開けた。

ハルヒが張り切る事って…またアレか？  
何やら不穏な空気を察しつつも、ここまで足を運んで  
今さら引き返すのも時間の無駄に感じられた俺は、  
深く考えずに部室のドアを開けた。





「あく来た来た」  
あぐら座りでパソコンを眺めていたハルヒがこちらに気が付き  
グーッと伸びをしながら立ち上がった。



「遅かったじゃない、何してたのよ!？」

「俺にだってそれなりに、所用があるんだよ」

「へえ……。まさかとは思うけど、女の子から呼び出されたとか？」

「違えよっ!」

「ねえ、キョン。あんた今フリーよね？」

「あ？」

突然、声の調子が和らいだハルヒと違和感を感じ、目を向けるとそこには自らの下着を見せびらかすかのような、スカートを捲り上げるハルヒの姿があった。


「私で抜きなさい、キョン。」

今度は一転して、命令口調?



「な、何をっ!?!」  
拳動つてる俺に構わず、近付いてきたハルヒは  
おもむろに股間を鷲掴みにしてきた。  
しかも細やかに指先を揺らかせ、俺の理性を  
崩壊させる気満々!!  
こんなことつて……あり得ないッ!!

「私じゃ勃たないっつていうの?」  
横暴な命令はさらにヒートアップしていく。  
柔らかな頬つべたを擦り寄せながら、ハルヒの  
いいから私をオカズにオナニーしなさい!!  
ハルヒの甘い吐息が首筋をくすぐる。



おたおたしてる間に、手際よくズボンのジッパーを勝手に下げ、俺のモノを引つ張りだしているハルヒ。そして恐ろしいことに、それを口に含む愛撫行為、すなわちフェラチオに及ぼうとしているではないか。可愛い顔に似合わず、意外と進んでいるのか？むしろ可愛いからこそ経験済みなのか？

「涼宮さんが臨んでいることだから。逆らったりしてはダメ」  
パイプ椅子に腰掛け、本に目を落とすまま呟いたのは長門。  
長門が居たことに初めて気が付き、俺はさらに狼狽えた。  
「ちよ……ま……長門が見てる、見てる！」  
「いいじゃない別に、平気よ」  
ンナ馬鹿なっ！

「私だって健康な女の子なんだし、たまには欲求が不満して悶々としちゃうことだってあるんだからっ。  
今日は私がキョンとしたいの！」





「暇なんだったら協力しなさい、キョン」  
次の瞬間、運動神経抜群、柔道やらせたら黒帯クラスの  
ハルヒの投げによって俺はあっさりと床に転がされていた。  
すぐさま、俺を抑え付けるよう長門に指示を飛ばすハルヒ。  
「……わかった」

顔面騎乗のポーズで股間を押し付けるように乗っかってくる。  
つて長門お、なんでわざわざ顔に乗るっ！  
しかも文庫を抱える姿勢に代わりはないっ！  
こっちに興味がないんだったら、ハルヒの言うことなんか聞くなっ！

「重くない？」  
「お、重くはないが……（長門の……匂いが……）」  
この薄布越しに長門の一番敏感な部分があるのかと思  
うと、イヤでも興奮が増してくる。鼓動が高鳴っていく。  
呼吸が荒くなる。  
俺が一息吐くたびに、口が当たっている部分の下着が  
じわっと湿り気を帯びるのが分かる。  
布が湿り気を帯びるに連れ、長門の素肌にピッタリと  
貼り付き始め、股間の、長門の割れ目の形が徐々に浮か  
び上がってくる。



「さてと…」  
得意げに俺を見下ろしてくるハルヒと目が合った。  
ダメだ…。  
どう抗つても、俺がハルヒの口腔愛撫で勃たせて  
しまった事実は覆しようがない。  
その証拠に、俺の一物はハルヒの唾液でテカテカと  
濡れ輝き、ハルヒの唾液臭をプンプンと纏って、そそり  
立っている。  
恥ずかしくて目を合わせているのが辛い。

そんな自らの、性戯の成果に満足したのか  
上機嫌な笑顔を浮かべ、ハルヒは椅子に腰を下す。  
そして上履きを脱ぎ捨てると、あろうことか  
靴下越しに足で、俺のペニスをシゴキ始めた。





ハルヒの足技は絶品だった。

何をしたら俺が悦び、何をしたら  
絶頂に達するのかを女の直感で察し  
明らかにそれを実行しようとしている。

このままではハルヒの思うがままに、彼女の目の前で  
無様な射精ショーを演じてしまうのは確実だ。

目をギュッと瞑っていれば、愛撫に興じるハルヒの姿  
ローアングルからの挑発的な下着姿は見なくて済む。  
絶頂の瞬間を少しでも先延ばししようと、俺は必死  
の防衛戦を繰り広げた。

だが、その防衛ラインもあっさりと決壊  
してしまふ一瞬。

頭上から降ってくるハルヒの甘い鳴き声と  
俺を弄びながら、その行為に興奮したのか  
自慰行為に耽るハルヒの姿。

うつすらと目を開けた瞬間  
頬を紅潮させたハルヒと目が  
合ってしまった。

ニツと笑ったハルヒは  
「あんたも自分でしなさいよう！  
と、相変わらずの女王様口調。

股間から淫猥な水音をたてつつ  
足コキに興じるハルヒを見つめて  
いるうちに、思わず俺の手も、  
自分のペニスを握りしめていた。



絶えず上下に動き続け、  
肉棒への刺激を途切れさせない  
ハルの足使い。  
先端に絡みついたまま、小刻みな  
蠢動を止めない指使い。

時に優しく。  
時に荒々しく。  
時に亀頭を。  
時に睾丸を。

縦横無尽なハルの足技に  
促されるかのように、  
自分でも思わず竿を扱ってしまう。

気が付いたときには  
ハルのソックスの間で  
親指と人差し指の間  
豪快に精子を噴き出していた。



勢いやすぎ!!

俺のコトををイカせた達成感と、自らが  
まだオナニー中だった興奮も手伝ってか、  
荒い息を吐きつつも、笑顔を浮かべるハルヒ。

机の前に立って両腕を後ろ手に着きつつ、  
「今度はソレ、私に挿れなさい」と  
と立位挿入を指示。

目の前で。  
同級生が。  
否。  
涼宮ハルヒが。  
潤みきった性器を拡げて。  
誘っている。

吸い寄せられるかのようにハルヒ  
の腰を掴み、俺は躊躇うことなく  
ペニスを押し込んだ。  
ハルヒの短い悲鳴が聞こえたよう  
な気がしたが、恐らくは歓喜の嬌声  
であろう。





まるで子供同士の性行のように  
ひたすらに、高速に、ハルヒの膣内へ  
の挿入を繰り返す。

腰を振りながら、ふと気付いた。  
「あ、ゴムしてねえ！」  
さつき射精した精子がまだ先っぽに残ってるかも！  
このまま続けたらハルヒが妊娠してしまっても？  
でも…今さら抜いても手遅れかもしれないし…」  
グルグルと思考が巡回するも、その間も腰振りには  
止まらない。

人差し指を噛むようにして襲い来る快感に耐えて  
いたハルヒがついに、大きく仰け反って絶頂を迎えた。  
「イ…ったのか？」  
男性のそれと違って、激しく汁が出るワケではない。  
それは予備知識として把握している。

だがハルヒの絶頂は、分かりやすい程に、激しかった。  
接合部が、腰を動かしてもいらないのにとクつき、隙間  
から女の子の汁が細かい飛沫となって噴き出してくる。







射精が終わった後もまだ俺の一本はその固さが衰えず、二人の接合は続いている。  
むしろ、ハルヒが俺への拘束を解いて、体位が変わった瞬間にも、ハルヒの膣口の形状が変わった瞬間に反応して、二度目、三度目の射精がハルヒの中に炸裂してしまう。

「キョソンのって……意外とスゴイね。また全然……固いままなもの」

照れながら呟くハルヒを見てみると、こうちまで恥ずかしくなってきた。

「ハ、ハルヒの中があまりにキモチいいから出たくないのかな」

愛想笑いで誤魔化そうとしている目の前でも、俺の息子はハルヒの中での活躍をやめてくれない。



「よし、もう一回しましょう！」

曲来るわよね！」

語尾が疑問系ではなく命令形なのはもう慣れた。

収まらない俺に気を遣ってくれたのか、はたまた自分がまたムラムラとしたからなのか。

詳細は不明ながらも二回戦へ。

「のまんま、密蔵まで連れてって」

ハルビのリクエエストにより、先ほども抱き合っていた机を離れ、繋がったまま窓際に移動しての後背位。

「お日様の光を浴びながら舌打ちするなんてステキじゃない？」

よくわからんが、このプレイには彼女なりの美学があるらしい。ガラス窓に手を着き、尻を突き出してくる。その尻を掴んでバックから挿入。古い部室棟は窓の立て付けも悪く、二人が腰を打ち付け合う度に、ガラス戸がガタガタ音を立てて揺れる。



ふと気が付くと、  
向こうの校舎の廊下に人影あり。  
部室の俺達に気付いて、にこやかに  
手を振っているのは、朝比奈さんだ。  
「ごめんよ、朝比奈さん。  
君に笑顔で手を振り返しつつも、  
俺の下半身はハルヒの中で蕩けそう  
になっているんだあ…」



妙な罪悪感を憶えつつも、  
ハルヒに出し入れする快感は止まらない。

ハルヒの方は関係を隠す気もないらしく  
喘ぎ顔全開で感じまくっている。  
ば、バカッ！  
だからって、乳首モロ出しでそんな風に  
ガラス戸に胸押し付けたら…。

朝比奈さんに見られながらも、俺とハルヒの性交は止まらない。それでも腰を振るペースが落ちたことに気を悪くしたのか、はたまた興奮をさらに誘おうとしているのか、後ろを振り返り、自らの手で尻肉を押し開いて、綺麗なピンク色をしたアナルを晒してくるハルヒ。

ここでハルヒの性欲を心底満足させることが出来たら、ハルヒともっと親しい関係になれたら。

いずれはこの菊門に挿れることも彼女は許してくれるのだろうか。排泄器官を性戯の対象として穿られた時、この、我が侬で、プライドの高い美少女は、どんな声を出して善がるのだろうか。





そんなゴトを考えているうちに興奮が最高潮へと達してしまった。まさしくハルヒの策に嵌ったと言ったところだろうか。



あまりにも急に込み上げてきたせいで中出しの了解を得る間もなく、ハルヒの中へ精子注入してしまった。まあ…本回二度目の膣内射精だし、拒否されても今さらなワケだが。さて…あと何回交尾をすれば、この厄介な少女は俺を解放してくれるのだろうか？

## → コツティニュード

- 今回の話作るに当たって、練ったネタが全部で3本。  
ハルヒ完全デレモードにするか、  
ツンモード全開の女王様本にするか、  
むしろ長門有希メインのメガネ本にするか。

悩みに悩んだ末、  
ハルヒ女王様本にしてみましたがいかがだったでしょうか？  
ん？ いつもと代わり映えない？  
描きやすいからそれでイイノデスヨ。

けど、個人的には長門メガネ本を描きたかったのかもしれない。次、ハルヒ本描く機会があったら、高確率で長門本？

- てか春にFFXII本出した時にも同じこと愚痴った気がするけど、原作にキャラ立ちのある二次創作って、面倒ですね(お

長門が主人公のコトを何て呼ぶのか調べるのに半日掛かっちゃいました。  
そして「そもそも呼称使わないんじゃね？」という本末転倒な結論に至ったワケですがw

- とりあえずアニメを最後まで見て。  
気が向いたらまたエッチい本を出すかもしれませんので、その際には改めてお手に取って頂ければ幸いです。

- とゆわけで。  
また次回。何かの作品でお逢いいたしましょ～。

↑エッチ↑

2006.6 VENOM  
Rusty Soul&或十せねか

ちあ～

# FREE♡

# TALK

↓スカート↓

- こんにちは、または初めまして。初挑戦の「涼宮ハルヒの憂鬱」本をお手に取って下さりありがとうございます！
- ここ最近二次創作では、R0やらパンヤやらFFやらゲーム系ばかり描いてたので原作が小説の作品で描くのは久しぶりです。去年のマリみて本以来？
- ハルヒアニメ、最初は全然チェックしていなかったのなんです。でもある日突然友人が「ハルヒ印すげええええええええ」と洗脳され大絶賛していたので気になって見始めました。そして気付いたら本描いてました(°▽°)
- というかむしろアニメ見るまで小説の方もノータッチだった口でw 一見さんに優しくない出来のアニメだった為、やむなく小説をチラチラ見たような？w
- 一人称語り多くて、キョンの声優さん大変そうだな〜と、ちょっと気の毒に思っていたが、小説の方見たら小説もバリバリ一人称なんですね。ワラタ。
- ハルヒのツンデレ比率は、ツン9割デレ1割くらいですかね？なかなか絶妙なバランスで素晴らしいです。そしてアニメ9話の、ツンデレ描写っぷりがステキ。

コソティニュー →



# 涼宮ヲレヒの睦言

すずみやはるひのむつごと

Suzumiya Haruhi no Yutsu fan book vol.1

PRESENTED BY VENOM

RUSTY SOUL  
ALTO SENEKA

**2006-6-18** 初版発行

**2006-6-30** 二版発行

<http://www.venom-plus.com/>  
[venom@v002.vaio.ne.jp](mailto:venom@v002.vaio.ne.jp)

- \* 本誌を無断で複製・転載することを禁じます
- \* 本誌をスキャンした画像ファイルの複製・転載・配布・交換等の行為を禁じます
- \* 18歳未満の方の購読を禁じます

# 涼宮ハルヒの睦言

ちびむすぶろのVENOM presents

VENOM Presents.